

## 臨床研究部

### ■ 内容

臨床研究とは、病気の予防・診断・治療方法の改善や、病気の原因の解明、患者さんの生活の質の向上などを目的として行われる医学研究であり、治験等の臨床試験と観察研究、橋渡し(トランスレーショナル)研究に分けられます。患者さんのために、より良い医療を提供したいという思いと病気の原因やメカニズムへの探究心がこれらの研究の原動力であり、多岐にわたる小児疾患の専門的な医療を担っている当センターは、豊富な症例を用いたさまざまな臨床研究を生み出す潜在能力を有しています。臨床研究部は2017年4月に新設され、研究倫理や利益相反といった研究に必要なルールを守って、医療現場ならではの臨床研究を行っています。

臨床研究部には、実験・研究を行う臨床研究室(3階病棟エレベーター横)、研究費の申請・管理をはじめとした研究関連事務を行う臨床研究支援室(6階、管理部)、動物飼育室の管理や動物実験に関する教育・精度管理を担当する動物実験管理室の3つの部門(室)が設置されています。2017年度に臨床研究部は、文科省の研究機関として指定され、研究を業務として行う研究員を院内辞令により配置することとなりました。2023年度の研究員は医師13名(兼任12、専任1)で、臨床検査技師3名(兼任1、専任2)が研究業務と臨床研究室の管理を行っています。



検体保存に使用する安全キャビネット(左)と独立した換気装置を備えた染色ブース(右)

### ■ 実績(2022年度)

- 外部研究費:51件、31,526,877円
- 動物実験:4件(実験動物委員会承認件数)、マウス・ラット延べ95匹
- 標本作製:パラフィンブロック 110個(薄切枚数29,874枚)、免疫組織化学染色 803枚
- FISH(fluorescence in situ hybridization):78件(249枚)
- 検体保存:細胞保存 512件、組織保存 48件

臨床研究部は、がんゲノム医療、がん免疫療法などの先端医療・検査にも積極的に関与しています。病理診断科と連携し、小児がんの病理診断に必要な特殊な免疫染色、

FISHによる遺伝子解析を行い、院内だけでなく、全国の小児がん診断に貢献しています。

当センターは2018年のがんゲノム医療連携病院に指定され、埼玉県立がんセンター(がんゲノム医療拠点病院)と連携し、がんゲノム遺伝子パネル検査を通じて、患者さんの一人ひとりに合わせた個別医療を実践しております(2022年度保険診療8件)。

臨床研究室では患者さんの同意が得られた場合には、研究のための検体保存を行っています。これらの貴重な検体を大切に保存し、臨床研究に活かすことにより、病気の原因の探求や新しい治療の開発を目指していきたいと考えています。

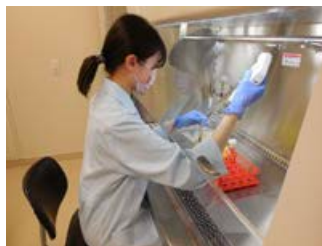
また、臨床研究室内のP2実験室では、白血病・リンパ腫に対するCAR-T細胞療法に用いるアフェレーシス産物の細胞調整を行っており、これまで6例実施しました。



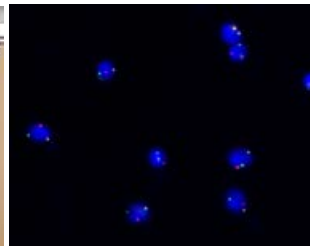
自動免疫染色装置



マウス飼育室



検体保存(骨髄血)



腫瘍細胞の遺伝子解析(FISH)

### ■ スタッフ紹介



部長  
中澤 温子

動物実験管理(兼)  
菅沼 栄介

副技師長(兼)  
急式 政志

臨床検査技師  
本田 聡子  
海口 璃奈

臨床研究支援室(兼)  
茂木 治  
早船 由香  
鮎澤 美代子

## 看護部

### 看護部の理念

埼玉県立小児医療センター看護部は、  
子どもたちの未来のために子どもたちの最善を目指した  
看護を提供します。

### 看護部の基本理念

- 高度医療に対応できる質の高い看護を提供します。
- 地域と連携した看護を推進します。
- 子どもの特性を踏まえた生活環境を提供します。
- 子どもの人権を保障し信頼される看護を提供します。
- 看護の専門性を深め、質向上に努めます。

#### ■ 看護部長からのあいさつ

「For the future, for the children～子どもたちの未来は私たちの未来～」を理念とし、高度で専門的な医療を提供しています。さいたま赤十字病院との連携により総合周産期母子医療センター、小児救命救急センター、移植センター（生体肝移植）を運営しています。リスクの高い新生児、重篤な状態の小児救急患者さんを受け入れています。小児がん拠点病院としては新生児期からAYA世代まで幅広い年齢層の子どもたちを受け入れ、子どもたちの年齢に合わせた環境を整えることに努めています。当センターでは「子ども憲章」を掲げ、どのような時でも一人の人間として尊重され、子どもにとって最善の方法を選択することを約束しています。そして、安心できる療養環境を提供することを大切にしています。その一環として看護部で

は、子どもの安全を守りながら回復促進を支援し、子どもの権利を尊重した身体抑制最小化に取り組んでいます。

看護師教育では看護師一人ひとりが、子どもの安全を第一に考え、責任ある行動をとることができる看護師を育成しています。教育体制はOJT（On the Job Training）を主軸とし、「共に学び、共に成長する」ことを目指しています。

私たちは、子どもとご家族の思いを大切にし、寄り添い、子どもたちの可能性、がんばる力を引き出し、回復過程を支援しています。

埼玉県唯一の小児専門病院看護部として、高度専門医療の充実に今後も取り組んでいきます。



2021年度から、日勤者、夜勤者の区別を明確にするために、ユニホームを一新しました。

## 看護部

### ■ 看護部の教育方針

子どもの権利を尊重し、その子どもにとって最善の看護を提供できるようにご家族とともに考え実践できる看護師を育成します。

#### [新入職員研修の様子]



#### [新卒看護師の支援]

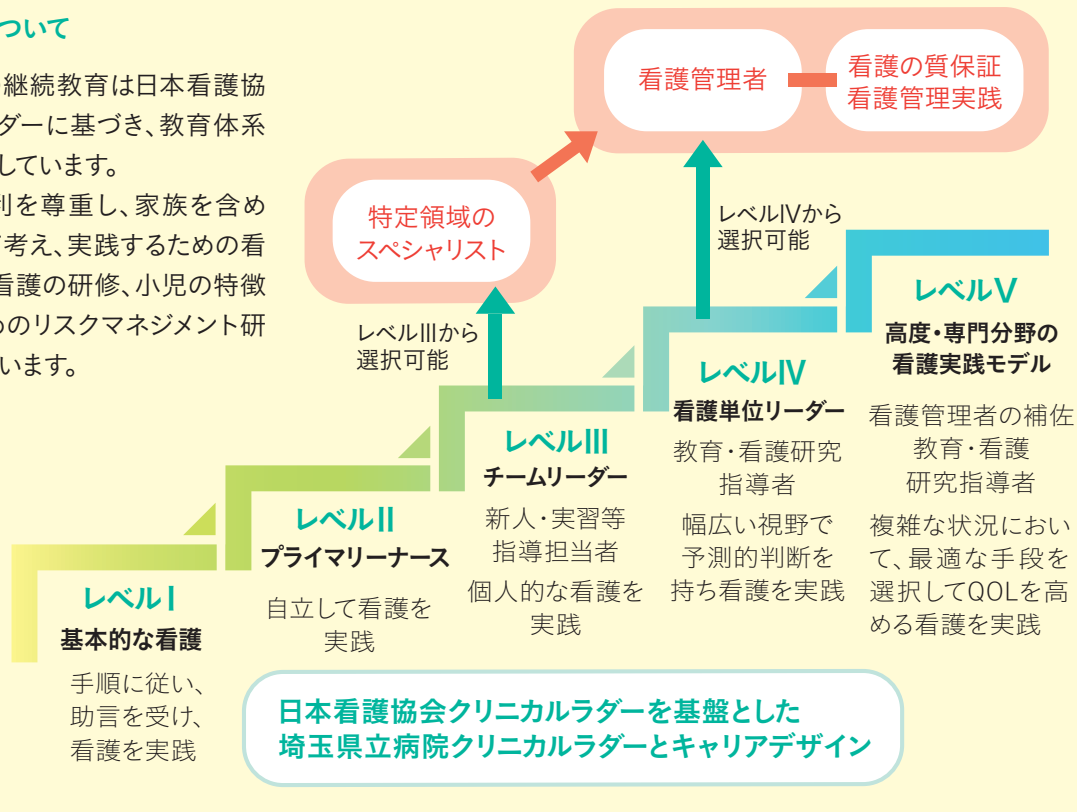
プリセプターシップ、パートナーシップナーシングシステム等を導入しています。



### ■ 継続教育について

当センターの継続教育は日本看護協会クリニカルラダーに基づき、教育体系を構築し、実施しています。

子どもの権利を尊重し、家族を含めた看護について考え、実践するための看護倫理や家族看護の研修、小児の特徴を理解するためのリスクマネジメント研修などを行っています。



### ■ 看護の質に対して

2001年から埼玉県立大学と共同研究でオレム看護理論を基盤とした看護過程の展開に取り組んできました。この看護過程はこども・ご家族の頑張る力を最大限に引きだすための援助を目的としています。2019年にこの理論は「こどもセルフケア看護理論」として確立し、当センターは小児看護の中でも先駆を切って取り組んでいます。



## 保健発達部

小児医療センターでは、医療の提供以外にも小児の全人的な成長のため、子どもの成長と発達にとって必要な保健と発達支援の一体的な運営を行い、さらに教育との連携を図っています。

## 保健部門

## ● 予防接種センター・予防接種外来

市町村の医療機関が行う予防接種事業の支援を行っています。具体的には、予防接種の実施、予防接種に関する相談、予防接種情報の提供などの活動を行っています。また、健康被害が発生した場合、その対策、調査などについて、県内の市町村からの相談窓口になっています。

予防接種外来では、主に地域で予防接種が受けられない方を対象にしています。具体的には、主に基礎疾患があるために接種に注意が必要な方、前回の接種でトラブルがあった方、海外渡航者、その他の理由のために当センターでの接種を希望される方です。令和4年度は、延べ接種患者数1,088名、延べ接種回数1,872件の実績、新規で97件のご紹介をいただきました。他の施設ではあまり接種されていないワクチンとしては、狂犬病ワクチン、A型肝炎ワクチン、髄膜炎菌ワクチンなどがあげられます。また、令和4年4月から子宮頸がんを予防するヒトパピローマウイルス(HPV)ワクチンの積極的推奨の差し控えが終了し、対象となる方への接種を積極的に行っています。当センターでは、定期(公費)で接種可能な4価ワクチン(ガーダシル®)、9価ワクチン(シルガード9®)の接種が可能です。また、院内の各診療科からの紹介は146件ありました。主に基礎疾患を有する長期入院や臓器移植後の患者さんへの接種が含まれます。

令和4年度の予防接種に関する医療相談事業の件数は503件(前年比43件減)で、内訳は電話347件(133件減)、メール156件(90件増)でした。

## ● 生活アレルギー外来

アレルギー性疾患の治療はもちろんのこと、食物を含めた環境因子の改善、アレルギーに関する情報を正確に伝えることに重点を置いています。令和4年度は65名の患者さんを新規にご紹介頂きました(前年比19名増)。当センターでは食物負荷試験を日帰り入院で行っており、令和4年度は、47件実施し近年増加傾向にあります。さらに令和3年度からは外来日を週2回に増やしておりますので、食物アレルギーだけでなく気管支喘息、アトピー性皮膚炎、繰り返す蕁麻疹などでお困りの患者さんをお気軽にご紹介ください。

## ■ 保健外来スタッフ紹介



副病院長  
保健発達部長  
浜野 晋一郎



感染免疫・  
アレルギー科  
菅沼 栄介



精神科  
舟橋 敬一



精神科  
平山 優美



遺伝科  
大橋 博文



遺伝科  
大場 大樹

## 【予防接種担当】

菅沼 栄介(月・水曜午前)、上島 洋二(月曜午後)、古市 美穂子(水曜午後)

## 【2022年度 予防接種実績】

(件)

ワクチン種類	二種混合(DT)	4
	三種混合(DPT)	25
	四種混合(DPT-IPV)	218
	A型肝炎	132
	BCG	19
	B型肝炎	277
	インフルエンザ	105
	ヒトパピローマ(HPV)	24
	ヒブワクチン	225
	ポリオ	29
	ムンプス	36
	ロタウイルス胃腸炎	114
	狂犬病	179
	水痘	40
	髄膜炎菌	1
	日本脳炎	128
	破傷風	24
	肺炎球菌(PCV, PPSV)	248
	風疹	6
	麻疹	4
麻疹・風疹	12	
麻疹・風疹混合	22	
合計	1,872件	

## 【生活アレルギー外来担当】佐藤 智、南部 明華(水・金曜午後)

## ● 精神科・精神保健外来

0歳児から小学校6年生までのお子さんを対象に心や発達の無病について診療しています。臨床心理士などのコメディカルスタッフや、教育・保健・福祉等の地域関係機関とも連携しながら、子育てを支援していけるよう心がけています。

## ● 遺伝相談外来

遺伝性疾患や先天異常について心配されている患児・家族に対して、正確な診断に基づいた医学的情報提供とともに心理的・社会的な支援にも配慮した診療を行う外来です。



## 保健発達部

- 作業療法士(5名)は、発達障害、疾病や外傷等によって家庭生活や集団生活に支障を来し、困難さを示すお子さんを対象として評価・支援を行っています。お子さんの発達特性やその段階を評価し、個々の発達が促進されるよう、適切な作業や遊びを用いて支援を行います。具体的な内容は以下の通りです。
- 自閉症スペクトラム障害や注意欠陥多動障害、発達性協調運動障害など神経発達症のお子さんを対象としています。作業療法理論やさまざまな発達理論に基づき、コミュニケーション能力の基礎や社会性、行動を統制する力、日常生活動作に必要な運動能力や認知能力、道具や物の操作能力といった学習や生活場面に適応する能力の向上を図ります。
- 脳性麻痺や先天性または後天性の身体・運動機能に障害のあるお子さんを対象としています。生活年齢や発達年齢に適した日常生活動作や学習的活動が行えるよう粗大運動、巧緻運動、知的能力の向上を図ります。
- 血液腫瘍性疾患により長期入院・加療が必要とされるお子さんを対象としています。長時間の臥床による廃用や社会生活体験の減少による発達遅滞を予防するため動機づけの高い遊びや作業活動により生活活動、学習的活動の維持・向上を図ります。
- 言語聴覚士(3名)は、コミュニケーション(話す・聞く・読む・書くなど)や食べる機能に困難のあるお子さんに対して、評価・支援を行っています。対象となるお子さんの背景にある問題は、以下のように多岐にわたります。言語発達障害/聴覚障害/口唇口蓋裂/構音障害/吃音/失語症/高次脳機能障害/学習障害/摂食嚥下障害/鼻咽腔閉鎖不全/舌小帯短縮症/気管切開後の発声発語障害/精神発達遅滞/自閉症スペクトラム 他
- 個別評価を実施し、必要な支援について保護者に助言し、学校・保育所・地域の療育機関等と連携をとっています。また、必要に応じて個別指導を実施します。
- 難聴ベビー外来や口唇口蓋裂児のご家族向け集団外来Kuchi-com(くちこみ)、発達障害児を対象とした早期子育てサポートプログラム(FESS)など、保護者支援も実施します。
- 臨床心理士・公認心理師(4名)は、お子さんの気かりなことについての心理療法や相談、心理検査を行っています。
- 心理療法:児童精神科医からの依頼で、お子さんの遊戯療法や認知行動療法、面接、並びにお子さんに関する保護者からの相談を行います。
- 発達相談:発達に関する相談を行います。お子さんの状況により、母子同室、または母子別室で相談を行います。
- 心理検査:各科からの依頼で、発達検査、知能検査、人格検査、神経心理学検査などを行います。

- 病棟回診:ソーシャルワーカーや在宅看護師と一緒に、NICUやがん病棟を含めた全病棟の回診、ならびにカンファレンスやコンサルテーションを行っています。
- 視能訓練士(2名)は眼科医の指示のもと眼科一般検査、視能訓練に携わっています。
- 検査内容  
眼科一般検査に加え、主に斜視や弱視に関する検査を行っています。  
視力検査、屈折検査、眼位・両眼視機能検査など
- 弱視訓練  
不同視弱視や斜視弱視に対してアイパッチなどの弱視訓練を行っています。
- ロービジョン訓練  
視覚障害がある児に対して、就学に必要な単眼鏡やルーペなど視覚的補助具の選定や指導を行っています。
- 多職種特別外来(アセスメント外来、ダウン症候群(DK)外来、哺乳摂食評価(もぐもぐ)外来、痙縮治療外来、超・極低出生体重児フォローアップ(つくしんぼ)外来など):医師や看護師と共に、多職種が関わり評価・指導を行います。



理学療法室



作業療法室



スタッフ一同





## 検査技術部

### ■ 検査技術部

検査技術部はすべての患者さんのために良質な検査データの提供に努めるとともに高度先進医療を担う病院の臨床検査技師として高い技術と知識の習得に努めています。また、国際規格ISO15189認定を取得しています。そして、各々の検査室、各々の職員が協力して病気の診断や治療に貢献するため、日夜診療支援を行っています。

### ■ 生化学・免疫検査室

未熟児・新生児の微量検体に対応可能な生化学免疫検査機器を導入し診察前検査や救急検査に24時間対応しています。また、肝臓移植手術の開始に伴い免疫抑制剤使用時の血中薬物濃度検査も、24時間迅速対応で実施しています。



生化学自動分析機

### ■ 生理検査室

患者さんに直接検査装置の一部を装着したり当てたりして検査をします。心電図、負荷心電図、ホルター心電図、脳波、大脳誘発、心エコー、肺機能、聴覚等の検査を行っています。乳幼児では眠剤を使用し、眠ってから検査を実施する場合があります。また年少の患者さんには検査時DVDや音楽などを用いて、検査に対する不安や恐怖心を軽減できるよう工夫して検査を行っています。



トレッドミル検査

### ■ 輸血検査室

ABO型、Rh型の血液型検査、不規則抗体スクリーニング検査、直接・間接クームス検査、交差適合試験など、安全な輸血のための検査を行っています。手術中の出血や血液疾患の治療に必要な血液製剤の発注・予約・在庫管理を行っています。主治医、血液センターと

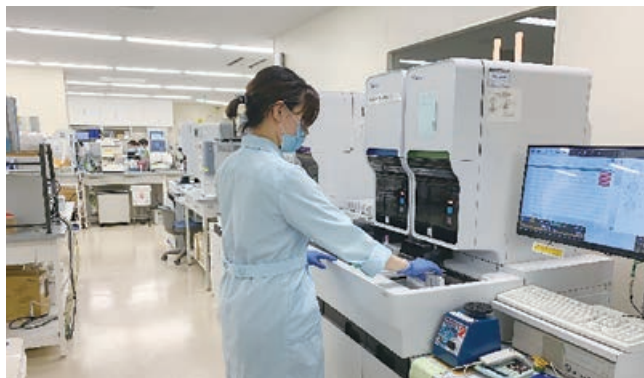
緊密に連絡を取り、無駄のない製剤管理・供給を心がけています。

### ■ 細菌検査室

細菌検査室では、患者さんの検体から感染症の原因となる、細菌を分離培養し、同定・薬剤感受性試験を行っています。また、感染対策チーム(ICT)のメンバーとして、耐性菌の解析等を行い、院内感染の対策に努めています。その他、迅速検査や各種PCR検査を実施しています。いずれも患者さんの治療に有効なデータを的確に素早く報告できるよう心がけています。

### ■ 血液・一般検査室

血液検査部門は、貧血や血液・造血器腫瘍などの血液疾患を診断するため、血球算定、白血球分類、骨髄検査などの血液検査や、血友病などをはじめとする凝固異常の診断、術前検査、抗凝固療法のモニタリングなどの凝固検査を行っています。一般検査部門は、尿、便、髄液、体腔液など様々な材料を対象に検査を行っています。



血液自動分析

### ■ マス・スクリーニング検査室

新生児マス・スクリーニングは心身障害発症を予防する事業で、すべての新生児に対し公費で行われる検査です。2012年からタンデムマス質量分析装置を導入し、現在、内分泌疾患、糖質代謝異常、アミノ酸代謝異常、有機酸代謝異常および脂肪酸代謝異常の20疾患を対象とし検査を実施しています。

### ■ 遺伝検査室

遺伝科と連携のもと、様々な遺伝学的検査(染色体検査、FISH、マイクロアレイ、(MS)MLPA、シーケンス、次世代シーケンス)を用いた遺伝性疾患・先天異常症候群の精密診断とともに、細胞・DNAバンクの運用を含めた、院内の遺伝学的解析の包括的情報管理センターの機能を担っています。

### ■ スタッフ紹介

部長	小山 真弘	[職員構成]
副部長	榎本 英雄	臨床検査技師
副部長	坂中 須美子	常勤:41名
		非常勤:7名
		その他の職員
		非常勤:8名



## 栄養部

### ■ 理念

私たちはこどもたちの未来のため、治療、発達、発育をささえるため、一人ひとりに合った適切な栄養管理を実践します。

### ■ 基本方針

- 1 質の高い信頼されるフードサービスを提供します
- 2 医師と連携し個人に合わせた栄養指導を行います
- 3 治療目的達成に向けたチーム医療を実践します
- 4 危機管理体制の整備を行います

### ■ フードサービス

厚生労働省の定める健康保険法「入院時食事療養費I」の規定に基づき実施しています。

治療の一環として食事を位置づけており栄養成分管理を行っています。守るべき3つの『食』をコンセプトに朝、昼、夕の他10時、15時のおやつや離乳食、ミルクや経腸栄養剤の提供を行っています。

#### ● 「高度専門・最新医療を支える 食」

食品の選定から献立管理まで病院の管理栄養士が品質管理を行っており、HACCP方式導入による徹底した衛生管理のもと、フードサービスを行っています。

アクアガスオープンの導入により厳しい衛生管理とおいしさとの両立が可能となりました。

入院患者の年齢は様々で成長、発育に合わせた量の調整や形態の工夫を行っています。また厳しい治療中の回復までの期間をつなぐ食事として、嗜好、症状により個別に選択できる“アラカルト食”の提供を行っています。

#### ● 「子どもたちを育む 食」

食器を選ぶ際には、伝統的な文化を取り入れる一方、楽しさ、使いやすさなどにも配慮しています。選択食の他、季節に合わせた行事食にはカードを添えて提供しています。入院中にお誕生日を迎えた患者さんには15時のおやつに、バースデイカード&ケーキのワゴンサービス、さらに希望者にはポラロイド写真の撮影サービスも行い、病棟スタッフや家族と共にお祝いをしています。

#### ● 「いざというときの 食」

災害に強い厨房づくりや、防災備蓄品の整備、業務継続計画を作成し危機管理体制を整えています。

### ■ 栄養指導

成長や発達に応じた食事の進め方、各疾病に合わせた治療食について等、継続した指導により家庭での食事がスムーズに実践できるよう個々に寄り添っ

た対応を心掛けています。

個別栄養指導は入院、外来合わせ年間800件、腎疾患、I型糖尿病、II型糖尿病、肥満症、先天性代謝異常症、食物アレルギー等のほか体重増加不良、経口移行、食生活全般等内容は様々です。

集団指導は、アミノ酸代謝異常症を持つ家族の会、小児特有の集団指導外来(DK外来、PW外来、もぐもぐ外来等)にコメディカルメンバーの一員として参画し食や食に関する環境面から関わっています。

### ■ NST活動

平成20年に栄養サポートチーム(以下NST)を立ち上げ、平成25年4月に日本臨床栄養代謝学会のNST稼働施設認定を取得しました。

メンバーは医師、看護師、薬剤師、臨床検査技師、理学療法士、作業療法士、医事担当職員、管理栄養士で構成されています。①入院患者の栄養評価②回診(1回/週)③コンサルテーション(随時)④勉強会(3回/年)⑤委員会(1回/隔月)が主な活動です。各々の専門性を出し合い、一人ひとりに合わせた最良の栄養支援が行えるNSTをめざしています。また、褥瘡対策委員会、クリニカルカンファレンス等へも参画しチーム医療の一翼を担っています。



スタッフ一同



入院中のお食事

## 臨床工学部

### ■ 臨床工学技士とは

臨床工学技士は、昭和62年に誕生した国家資格です。医師の指示の下に、生命維持管理装置の操作および保守管理を行う事を業とする医療機器の専門職種で、医師をはじめ看護師などと共に医療機器の高度化・複雑化が一層進むなかチーム医療の一員として生命維持をサポートしています。現在、9名の臨床工学技士が在籍し緊急時対応を行うため当直体制をとっています。

### ■ 主な業務内容

#### ● 体外循環業務

先天性心疾患を持つ患児に対して、心臓と肺の代わりをする人工心肺装置を操作しています。当センターでは、学会認定資格の体外循環技術認定士が7名おり安全な人工心肺を施行するように心がけています。また、重症の循環不全・呼吸不全患者へはECMO(補助循環)を導入し、医師・看護師と共に管理を行っています。

#### ● 呼吸療法業務

通常の呼吸療法だけでなくマスク式人工呼吸器やNHF療法のフィッティング、NO吸入療法や低酸素療法など特殊な呼吸療法についても関わっています。また、自己研鑽の一つとして呼吸療法認定士を取得するようにしています。

#### ● 血液浄化・アフェレーシス療法

急性腎不全に対し持続的腎代替療法(CRRT)や血漿交換療法(PE)も行っています。また、末梢血幹細胞採取や骨髄血濃縮、CRT-T療法などのアフェレーシス療法も行っています。

#### ● 医療機器管理業務

NICUやPICUでは人工呼吸器など多くの生命維持管理装置や患者監視装置、治療機器を使用しています。このような医療機器の管理はメーカー保守だけでなく、院内で臨床工学技士が点検し緊急時の対応を行い適正な管理を行っています。また、医療機器を安全に使用するために医師や看護師への勉強会を年間約200回行っています。

#### ● 在宅医療業務

臨床工学部では開院当初から在宅医療にも積極的に関与してきました。在宅医療で使われる人工呼吸器、吸引器、吸入器、パルスオキシメーターなどを適正に使用することにより患者や家族のQOLの向上につながります。例えば、在宅人工呼吸器の導入にはご両親へ機器の使用方法、回路交換、トラブル対応、移動シミュレーションなどを指導し安全に使用できる

ようにサポートしています。2022年度に在宅人工呼吸器を導入した患児は23名、在宅酸素療法56名、経管栄養ポンプ16名となっています。

### ■ 業務実績(2022年度)

(件)

臨床業務	人工心肺件数	154
	補助循環件数	6
	呼吸療法関連	
	人工呼吸器組立・導入	1,313
	NO吸入療法組立・導入	68
	HFNC組立・導入	252
	人工呼吸器・呼吸療法巡回業務	12,347
	血液浄化・アフェレーシス	
	CRRT	40
	末梢血幹細胞採取・骨髄血濃縮・CAR-T療法	17
	血漿交換	20
	ペースメーカーチェック	0
	自己血回収	8
	日常点検	7,501
機器管理	点検・修理・検収(ME)	1,376
	定期点検(ME)	766
	定期点検(メーカー)	323
検討・調査		159
指導・コンサルタント		23
勉強会		195
在宅医療	院内指導・コンサルト・教育	218
	検討調査(在宅導入に向けてetc)	554
	院内点検	86
	メーカー点検・定期点検	76
	在宅人工呼吸器データ整理	20
自宅訪問(退院前・退院後)		0



スタッフ一同

## 地域連携・相談支援センター

地域連携・相談支援センターは病院の窓口として様々な役割を担っています。

### 地域連携部門

通常は患者さん・ご家族が直接お電話で予約取得をしていただきますが、下記の場合は地域連携・相談支援センターが受診の調整を行います。

- 通常予約よりも早期受診が必要な場合
- 複数の診療科を受診する場合
- 外国籍の方で支援が必要な場合
- 医療的ケアが必要な患者さんで外来受診の負担が大きい場合

また、患者さんの来院状況、診療経過等をご紹介をいただいた医療機関の先生へ速やかにご報告します。

多様な情報を一元的に管理し、患者さんのニーズに応えるとともに、地域医療機関及び関係機関との連携を大切にしていきたいと考えています。更に、地域連携懇談会や埼玉小児疾患集談会、各種研修会、県民セミナー等の企画・運営を通して地域の先生方と顔の見える関係作りに取り組めます。

### 相談支援部門

地域の保健・福祉・教育等の関係機関との連携のもと、病気や障害を抱える患者さんご家族が「当たり前」に生活していけるよう、SW（ソーシャルワーカー）、看護師、CLS（チャイルド・ライフ・スペシャリスト）の専門職が連携して支援を行います。また、入院前・入院中・退院後の療養生活に関わる様々な相談にも対応します。

### その他の機能

#### ■ 小児がん相談支援センター

患者さん・ご家族が抱える療養生活の不安や負担を和らげるため、様々な制度の紹介や生活上の相談をお受けします。

#### ■ 埼玉県移行期医療支援センター

小児期発症の慢性疾患を有し成人になっていく患者さんが成人病院へスムーズに移行できるようサポートを行います。相談専用電話 048-601-1509(平日8:45~17:00)



2F6番窓口

相談窓口 平日8:45~17:00  
TEL 048-601-2200(代表)



スタッフ一同

## 入退院支援センター

入退院支援センターは、患者さん・ご家族への入院前支援、入院調整、退院支援を主に担っています。

### ■ 主な業務内容

#### ● 入院前支援

検査や治療、手術の入院が決まった際の患者さんのご家族への説明を外来の看護師に代わり2021年3月より入退院支援センターが原則担うこととなりました。これにより、患者さんおよびご家族をお待たせすることなく円滑に入院説明を行うことができるようになりました。

#### ● 入院調整

入退院支援センターの大きな設置目的はベッドコントロールです。当センターに入院する患者さんの多くは非常に専門性の高い診療が必要かつ重症例であるため、以前はそれぞれの病棟が担当する診療科を固定していました。しかしその弊害として、ある診療科の新規患者さんの依頼が来ても、その診療科のベッドが満床であった場合、病院全体では空床があっても患者さんの入院を断らざるを得ない状況がありました。その打開策として各病棟に診療科を特定しない「共有ベッド」を設け、各病棟があらゆる疾患・年齢に対応できる「循環型病棟運営」が可能となりました。現在では全体の約10%の共有ベッドがあるため、より効率的かつ円滑なベッドコントロールが可能となっています。

また、入院調整においては安心、安全な医療の提供を最優先に実施しています。依頼日当日または翌日に入院が必要な緊急入院の調整も入退院支援センターが一括して調整しています。

#### ● 退院支援

多くの患者さんは入院中に検査または治療が完結し退院します。しかし中には退院後も治療や医療的ケアが必要な患者さんもおります。そのような患者さんの退院後の支援も入退院支援センターの大きな役割の一つです。

患者さんの入院前、入院から退院まで、そして退院後の一連のプロセスが少しでも良いものになるよう努めています。



スタッフ一同

## 感染管理室

感染対策の目的は病院内での感染症や耐性菌の発生を未然に防ぎ、発生した場合はそれ以上拡大しないよう可及的速やかに制圧、終息させることです。また、耐性菌を増やさないためには抗菌薬適正使用も重要です。当センターでは患者さんやご家族が安心して受診、入院生活が送れるように、感染防止委員会を設置し、感染対策チーム（ICT）と抗菌薬適正使用支援チーム（AST）が活動しています。

### ■ 感染対策チームの主な取り組み

- 手洗い・手指消毒を中心とする標準予防策の徹底
- 感染症別・処置別の予防策実施
- 院内における医療関連感染の発生に関するデータの収集・分析（サーベイランス）
- 院内ラウンドによる感染防止対策の確認・指導
- 感染対策に関する職員教育、相談対応
- 感染症発生状況の把握と感染症発生時の対応
- 感染防止対策マニュアルの作成・改訂
- 地域医療機関および全国の小児医療施設、医師会、保健所との連携
- 職員向け研修会の実施
- 県民向け感染対策セミナーの実施

### ■ 抗菌薬適正使用支援チームの主な取り組み

- 抗菌薬適正使用マニュアル（抗菌薬選択、用法用量）の作成・改訂
- 特定抗菌薬の投与モニタリングと適切な感染症診療を目的とした診療介入
- 定期的な内服抗菌薬の採用見直し、処方回数モニタリング
- 職員向け研修会の実施
- 県内医療機関向け感染診療勉強会の実施



県民向け「感染対策セミナー」の様子

### 新型コロナウイルス感染症対応について

新型コロナウイルス感染症の感染症法上の扱いが5類に移行されましたが、当センターでは重症の患者さんや免疫が低下している患者さんの診療を行っているため、以下の取り組みを継続しています。引き続き感染防止策へのご協力をお願いします。最新情報は病院ホームページをご確認ください。

### ■ 院内の環境整備

- 入館者の体温測定、体調チェック
- 必要に応じた付き添い、面会者の人数制限
- 患者用テレビ電話の導入
- 手指消毒薬設置場所の増設
- 院内食事エリアの設置
- 有症状者の待合エリアの設置
- 院内の換気促進

### ■ 職員への感染防止の取り組み

- 新型コロナウイルス感染症院内感染対策マニュアルの作成、改訂
- 出勤前の体温測定、健康管理
- 手指衛生、勤務中のマスク着用の徹底
- リスクに応じた個人防護用具の適正な使用
- 業務中、休憩中のマスク非着用での会話の禁止、対面での食事の自粛
- WEB会議の導入

